なくとも，実際に紛争や戦争に巻き込まれてしまった場合に，人々がどのように社会を再編し，安定化させるかという点で，さらなる議論や結論づけができたように思われる．

また，評者が専門とするカンボジア国内，とくにカンボジア国立公文書館には，メコンデルタのクメール人に関する資料が，植民地期を中心に手つかずのまま数多く保存されている．植民地期には，カンボジアとメコンデルタ，さらにはラオスの上座仏教を結び付ける政策が実施された．その後カンボジアでは，1953 年の独立後に僧侶向けの教育組織などの改組や名称変更がみられたが，本書でも取り上げられているチトンの上座仏教寺院を評者が訪れたところ，植民地期に制定されたパーリ語学校などの名称が現在でも使われている状況を目にすることができた．今後は，フランス語による文献資料なども活用することで，さらに研究に厚みを増すことができると思われる．著者による今後の研究に期待したい．

小馬　徹．『「統治者なき社会」と統治―キプシギス民族の近代と前近代を中心に』神奈川大学出版会，2017 年，256 p.

石井洋子 *

2013 年 12 月，ケニアの独立 50 周年が各地で盛大に祝われ，19 世紀末から 70 年近くつづいたイギリス植民地政府からの完全なる脱却とケニアの未来を展望する，さまざまなイベントが繰り広げられた．しかし，ケニアの諸民族は近代化のプロセスをうまく乗りこなし，ネーション・ステートをスムーズに実現したのだろうか．そうとはいいがたい．本書は，キプシギス人が経験した「植民地化」と「脱植民地化」という二大局面に注目して，無文字社会を生きた人びとが外側から強制された識字的なシステムに否応なく「包摂」され，それにどう適応して社会をまとめ上げようとしたのか，その努力や苦難を歴史的観点から描くことを狙いとしている．

キプシギス人とは，南西ケニアに暮らす南ナイル語系の農牧民であり，年齢組織によって強い社会的団結力を維持してきた人びとである．そうした人びとも，圧倒的な力を有するイギリス植民地政府に対して太刀打ちできなかったのはいうまでも無い．植民地政府は，「部族」の概念を押しつけてキプシギス人を特定の領域に閉じ込め，英軍の懲罰遠征で家畜を掠奪し，農業適地を奪ってヨーロッパ人を入植させ，人びとを現金経済に組み込んでいった．その後の社会変化において，著者がとくに注目したのは，「言葉」，「法」，「時間」，「生活」，「挨拶」，「イニシエーション」という諸側面をめぐる行動の史的動態である．そもそも，強烈な統治者のいない社会の統制システムを紹介した“*African Political Systems*”［Fortes and Evans-Pritchard 1940］が，構造＝機能主義的で静態的な描写にとどまったのに対して，著者は歴史過程を重視した動態的なアフリカ研究を目指したと述べている（pp. 12-14）．キプシギス人社会の基礎的研究が薄いなかで，著者はゼロポイントと

* 聖心女子大学人間関係学科

なる伝統的なあり方を仔細に記述したうえで，その後の歴史的な動態を綿密なフィールドワークをもとに活写した．

さっそく，本書の流れをみてみよう．まずは，「言葉」である．多民族を有するケニアが統合するには，民族を超えて話される「スワヒリ語」が鍵となるのはいうまでもない．第1章では，隣国タンザニアがスワヒリ語を重用して実用的な公用語へと成長させていった結果，民族感情が希薄化して融和的な状況を生み出した一方，ケニアは植民地時代から一貫した言語政策を実施してこなかったために，スワヒリ語を国民統合の強力な手段とし損ねたと述べている．むしろ，宗主国言語の英語が重視されたことで，スワヒリ語は民衆の独立闘争を支えて植民地解放とブラック・パワーの象徴となっていったが，ケニア独立（1963年）後のネーション・ステート建設の支柱にはなり得なかったと説明している．

第2章は，「法」の問題を扱っている．キプシギス人社会で起きた2つの殺人事件を紹介し，ケニアにおける西欧近代法としてのケニア国家法とキプシギスの「慣習法」の関係性を明らかにした．二重法制下にあるケニアでは，村の長老たちが審議する村の裁判が予審の機能を担っており，被害者側へ「血償」となるウシを渡して重罪者を許す「儀礼的謝罪」の手はずも整える．ここでは，凶悪な男として恐れられていたキプシギス人の男が酒の場で諍いをおこし，キプシギス人男性を撲殺した事例，また酒に酔った異民族のエンブ人区長（District Officer）が地元のキプシギス人エリートを銃殺した事例を扱っているが，異民族間の「外殺人」である後者は慣習法が適用されないため，殺人者が人びとからのリンチを受け半殺しにされている．もとより殺人事件の被害者が国の法に厚く守られる可能性は低く，人びとは外より移入された国家法を信頼していない．著者は，識字的な西欧近代法としてのケニア国家法と，直接的で人格的な関係を取り扱うキプシギスの「慣習法」には，本質において大きな隔たりがあると，ネーション・ステート建設の困難さを論じている．

第3章のテーマは，「時間」である．ここでは，キプシギス人と隣人マサイの年齢組体系の「時の流れ方」と関連づけながら，西欧から持ち込まれた時間概念と伝統的な時間観の相克を描いている．キプシギス人は，父系祖先の霊魂が，子孫の肉体へ再来してその霊魂になるという円環型の年齢組体系を有していて，それは機械時計が象徴する時間観にも構造的に通じているという．一方，マサイ人は直線型の年齢組体系をもち，西欧の人工の時間とは異なる直線的な時間観をもっている．著者は，マサイ人が針も文字盤もないビーズの腕時計を製作・販売し，何不自由なく暮らす様子を観察し，植民者がもたらした異なる時の刻みに対する憧憬や，それを理解しようとするひとつの態度ではないかと論じている．

第4章は，「生活史」に注目している．著者は，ある氏族とその一家族の100年余りの生活経験を克明に写し出して，甚だしい社会変化とそれに必死に対応しようとする庶民

の苦闘を描いている．目を見張るのが，「牛の食べ物たる聖なる草を殺す」ことすら許さない誇り高き牧夫から数世代のうちに，土地も仕事もなく，先のみえない時代に突入した過酷な経済状況である（p. 139）．とくに 90 年代の経済状況は絶望的であるが，窮乏する人びとを追い詰めたのはコネや賄賂，詐欺，搾取などといった個人のコントロールを超えたものとの格闘の連続であった．かつて，年齢階梯の戦士階級にあったキプシギス人は家畜の掠奪戦で自らの富を増やしたが，イギリス植民地政府はそれを阻止してパクス・ブリタニカをもたらした．しかし著者は，イギリスがもたらした「平和の時代」は植民地や部族内部での新たなパイをめぐる闘争の始まりでもあり，残されたパイは余りにも小さいと，新たなる困難を指摘している（p. 163）．

つづく第 5 章では，キプシギス人の「握手」についての説明がされる．前述のとおり，キプシギスには西欧的な裁判機構のもとに民族の「慣習法」が機能しているが，第 2 章でも紹介された村の裁判では，握手が重要とされた．つまり，握手は混乱した状況を平常化する作用があるため，長老たちによる裁定が下されたときには，当事者を代表する二人の男性が握手をして立ち去ることで，問題を水に流すのだという．また，握手は常に社会的に優位な者（世代が上の者）から働きかけられ，両者の緊張を即座に緩和する効果もあるという．本章では，いわゆる王や首長のいない「平等主義的」な社会，「統治者なき社会」であるキプシギス人社会では，個々の差異からもたらされる反発を自発的な同調へと昇華させる文化装置として，挨拶は大変に重要であると著者は述べている（p. 208）．

最後の第 6 章は，「イニシエーション」を扱っている．キプシギスにとって，戦士階級は華の時代であり，戦士になる前の子供時代にいる少年は大人の秘密や，恋愛と結婚が許されるなどの特権を渇望し，社会への反抗を増大させたという．一方，戦士階級にいる者は，自分たちをその上の長老階梯へと押し出すことを阻止しようと，少年への警戒と統制を怠らない．晴れて少年を戦士に迎えるイニシエーションは諸々の秘密を組み込み，少年たちの強烈な情緒的反抗の力を昇華させて力強い戦士を創り上げる原動力としたという．筆者は，民族のイニシエーションが実に見事に「思春期の反抗」という厄介で破壊的な力を極大化させつつも，社会建設の力へと巧みに転換させたと述べている．ここでも，社会を統治するひとつの仕組みが明らかにされた．

以上，本書の主要な部分をかいつまんでみたが，何より同書は著者の 50 篇もの論文や著書を参考文献として列挙しており，1979 年に最初のフィールドワークを実施して以降，38 回も参与観察を行なったものの集大成のひとつとして迫力がある．同じくケニアで調査する評者の研究対象は，キプシギス民族と農地をめぐってしばしば衝突するギクユ民族であり，評者は同じ水を飲む後輩として，著者の職人技を熟知したいという願望がある．その意味で，本書は人類学の教科書としても良質な材料を提供し，研究の手本を示している．たとえば，著者の徹底的に現地に分け入る実行力，鷹の目と蟻の目の両方をも

つバランスの取れた視点，大胆な比較研究を積極的に用いて特徴を割り出す方法（キプシギス／マサイ，ケニア／日本，ケニア／タンザニア等），自らを人類学徒と称するように大変に控えめで真面目な態度が各所にうかがえると同時に，文章全体の表現力は秀逸である．

敢えて本書への希望をいえば，著者のような調査のプロから読者が学ぶことは多いため，フィールドワークに関する具体的手法がより詳しく描かれれば良かった．人類学は「人びとの日常の営みの委細を統計や経済指標に還元しないで，直に丸ごと描き出す」ことが重要だが，どのような体で対象にアプローチし，どのように調査をすれば人びとの「心」や「文化」に近づけるのかを示すことで，異分野の研究者やアフリカで仕事をする実務者，フィールドワーク初心者等への良き案内にもなる．本書は6論文をまとめた厚い書であるが，一貫して，国家的統治に頑強に抗いつつも，その統治制度を徐々に咀嚼・受容して現在に至る道筋を丹念に辿ろうと努力している．なぜ，未だにアフリカがネーション・ステートを作れないのか，社会の内面から読み解く努力である．

21世紀を生きるケニアの人びとは，いまだ数々の困難に直面し，都市の建築ラッシュとは裏腹にその貧困は厳しさを増している．そうした人びとにどのように力を貸していくのか，現地の人びとの視点に寄り添いつつも，歴史への視点が重要だと本書は認識させてくれる．

引　用　文　献

Fortes, M. and Evans-Pritchard, E. 1940. *African Political Systems*. London: Oxford University Press.

Robert G. Rabil. *The Syrian Refugee Crisis in Lebanon: The Double Tragedy of Refugees and Impacted Host Communities*. London: Lexington Books, 2016, 125 p.

望月　葵 *

2011年に勃発したシリア内戦は，未曽有の難民問題を招いた．2015年には欧州に避難するシリア難民の姿が相次いでメディアに取り上げられ，世界の関心の高まりに呼応してか，ドイツをはじめとする欧州各国がシリア難民を積極的に受け入れる姿勢を示した．

その一方で，2011年のシリア難民発生時から，難民を最も受け入れてきたのはシリアの近隣諸国である．その中でも本書が焦点を当てているレバノンは，今や100万人以上のシリア難民を受け入れており，国内人口比においては今日最も多くの難民を受け入れている国家である．

本書の目的は，シリア難民危機がレバノン社会に何をもたらしたのかについて論じることである．本書では，シリア難民危機によってレバノンに大量流入したのはシリア難民だけではなく，シリアに居住していたパレスチナ難民やレバノン人も含まれるとしており，

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科